



町民文芸

只見短歌会

四月詠草

大塚栄一

指導

古川 英子

花水木白ふ庭にて女の孫がひたすらボールを打つ音響く

関谷登美子

進学する孫出でし後見て巡り過ぎし日のこと思ひ出しをり

馬場 八智

車中にて隣に座りし女らの福祉の話に耳をそば立つ

新国由紀子

葉桜となりても日曜の鶴ヶ城シートを敷きし人ら賑はふ

小倉キミ子

屋根雪の落ちし刹那の雪煙視界閉ざして広がりてゆく

五十嵐夏美

日変りの寒さ言ひつぐ体弱き友気遣ひつつ暇乞ひなす

渡部ゆき子

就職せる孫を見送る門口に喜びつつも淋しさのあり

目黒 富子

向ひ家に入居する人訪れて手渡す鍵の重く感じぬ

渡部ヨリ子

違ふ紙を丁寧折りあげて一息つきつつコーヒーを飲む

新国 洋子

娘の留守に孫嫁菜をつくりくれ夕餉の卓は曾孫と賑はふ

(出詠順)

只見俳句会

五月例会

目黒十一

指導

都

春昼や湯飲み茶わんの色模様

投薬の多くなりゆく梅雨近し

一穂

雪解川濁と清の筋二つ

一ト雨で青さましゆく春時菜

恒夫

敦子

山頂に残る夕日やブナ若葉

浅草岳尾根白々と里桜

堰普請終えてこぶしの木の方へ

田水張る越後連山雲の中

礼

吉児

行く春や螺子のゆるみし古時計

青天井めでたく扇納めけり

初夏の風満身にダム堰堤

奥会津麦の秋風渡りけり

順子

邦男

雪濁り魚の眠れぬ谷の村

堅雪や人影走り犬走る

桜色の風渡りけり花の夜

雪解の川面の光風の音

修一

信

昼時や二人分け合う桜餅

春光に壁画の女微笑みて

湯疲れや身体投げ出す春の夜

ポンペイの奴隷あはれや春暮るる